

---

# 不幸だった私の転生物語

くーねる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不幸だった私の転生物語

### 【Nコード】

N9719P

### 【作者名】

くーねる

### 【あらすじ】

もともと運が悪かった私は、ある日とうとう死んでしまった。

その原因はなんと神様のミス！ 責任はあちらにあるので、チートな能力を付けてもらい違う世界へ転生する事になった。転生する先は・・・『ネギま！』の世界だった！！

私の第二の人生が今、幕を開ける。

## 第1話 プロローグ（前書き）

初めまして、くーねるです。

処女作ですので決して上手くはありませんが頑張りました。  
不自然な点があったら指摘していただければ幸いです。

それでは始めます。

## 第1話 プロローグ

私は運が悪い。

街を歩けば必ずと言っていいほどヤクザに絡まれるし、

車にひかれた回数は11歳の頃に三桁を更新した。

最近はさらに悪化してきて、空から鉄骨が降ってくるのが3日に一回はある。

そろそろ死ぬんじゃないかなー、とか思っていたら――――

――キキイイイイイイッ！！！！

ッガッシャアアン！！

なんと学校の帰り道、ダンプが横滑りしながらこっちに来たのである。

……………5台くらい。

……いや、さすがにコレはないでしょ？

だって学校に続く坂道ですよ？

しかもダンプも1台ずつ微妙に違う軌道で襲いかかってきたし……。

数々の不運を乗り越えてきた私でも、さすがにコレを避けることは  
できず、

「これなんて無理ゲー？」

私が思わず呟いた言葉が辞世の句となった。

「.....っ！.....っ！！」

……私を呼んでいるような声が聞こえる。

「.....っ！.....くださいっ！！」

……うるさい。

私は声の聞こえる方をまだしっかり覚醒していない頭で割り出し、  
そちらへ手を伸ばした。

「.....あ！ やつと起きて.....く、れ.....？」

そんな声をよそに私は手につかんだそれを思いっきり抱きしめる。

「ふえ.....？」

状況が理解できず間拔けな声をだす声の主。

「ふにゅ」

気の抜けた声を出しながらとてもやわらかいそれ……抱き枕を揉んで感触を確かめる。

「ひゃっ！ 何するん…っふああ！？ ふゃっ、んう…！」

むう、やわらかい……。

しばらく揉んでいると、  
やわらかかった抱き枕の1部が硬くなったので、つまみほぐしてみた。

「ひにゃあっ！！ ちょっ！ や、やめっ！ ふわああ、それ以上はあっ！！ んっ、あ、あああああア！！！！」

そんな甲高い鳴き声と共に抱き枕は身体を小刻みに震わせて動かなくなってしまった。

抱き枕が動かなくなっただけに満足して私は意識を手放すのだった。

.....

.....

...

「本当にすいませんでした……」

あの後起きたら、抱き枕もとい幼女に丸1日くらい説教された。

話を聞いてみると、どうやらこの幼女は神様らしい。

簡単には信じられない話だが、宙に浮いていたので嘘でもないだろう。



それよりも此方はずっと正座しっぱなしなのだ。

おかげで足が全く動かない。

ってか大丈夫かな？　なんか足真っ黒なんだけど……。

目の前の幼女に目を向ける。

それにしても……

「先ほども言ったように貴方はこちらのミスで死んでしまいました」

私が死んだのそっちのミスですか。どんだけ運悪いんだ私。

「それですネ、このままでは此方のメンツが立たないので別の世界で人生を謳歌していただきたいんです」

しかもミスをもみ消すためにこっちのご機嫌とりですか。

色々言いたいことがあるが、取りあえず

「異世界、ですか？」

一番疑問に思ったことを質問する。

「そうですね。貴方がもともいた世界以外に行ってもらうことにします」

「具体的には？」

「『ネギま!』の世界です」

あの世界か……。

「転生するにあたって、いくつか特典が追加されます」

まあ、生身だと死ぬだろうしね……。

「まず、不老不死ですね。エヴァを助けたいですし」

コレだけは譲れない。原作を知っているので、できれば吸血鬼にならずに幸せな人生を送って欲しい。

「ふふっ、そうですか。後は何が欲しいですか？」

「あと…は、そうですね……。TYPE - MOON の Fate に出てくる宝具と能力、月姫 のアルクエイドの空想具現化、るいは智を呼ぶの才能が欲しいですね。それとコミユ黒い竜と優しい王国のアバターの使役、高い解析能力が欲しいです」

コレだけあれば十分すぎるくらいだ。

「わかりました。あとついでに高い魔力と気、それらを使いこなす才能も追加しておきますね」

それはさすがにチート過ぎると思ったけど、貰える物は貰っておこう。

「最後に転生する時期ですが、原作開始700年前でいいですか？」

「そうですね。能力も試してみたいですし」

力加減がわからなくて原作キャラを殺すとかは勘弁したい。

「それから、あちらに行つてからやっていたきたいことがあります。」

世界樹を保護すること。創造主の死亡の確認。それから世界の滅亡といった危機を防ぐことです」

「世界樹の保護と創造主の死亡は、3つ目の世界の滅亡を阻止するためですか？」

幼女神様の言葉に自分の考えを返す。

「さすがですね。創造主はもちろん、世界樹を利用すれば世界征服できるかもしれませんから」

「わかりました」

「あと世界樹とパスを繋いでおきます。これで世界樹と会話ができます」

「ありがとうございます」

「最後になりますが貴方は私の加護により運がいくらか良くなつて

ます。ですから……」

今度こそ幸せになってください。

そんな妙に愛情のこもった言葉を最後に私は『ネギま!』の世界に転生した。

## 第2話 人物紹介（前書き）

るい智の呪いのリスクが低すぎるという意見があったので、変えさせていただきました。

これから設定が代わり次第、ここに追加していきたいと思います。

## 第2話 人物紹介

名前：アルトリア・ペンドラゴン

身長：154cm

体重：42kg

性別：男性

容姿はFateのセイバーと全く同じ。身長はもちろん、体重まで同じ。

これが神様に変えられたものではなく天然だから始末に負えない。実は自分の容姿を結構気にしている。本人曰く、出来ればもっと男

らしく筋肉もりもりに成りたかった。  
男なのにこの愛くるしい姿は、多くの男たちを魅了したらしい。  
そのため襲われた経験は三桁を越えるが、すべて返り討ちにしたと  
か。  
彼の一人称が「私」なのは、セイバーの口調を真似て以来それが身  
についてしまったためである。  
重度のヲタク。

## F a t e 風パラメーター

筋力：B（E）

耐久：A（D）

敏捷：EX（A+）

魔力：EX（- -）

幸運：C（E）

宝具：EX（- -）



（ ）内は生前のもの

スキル  
技能

直感：EX（A+）

もともと生前に持っていた第六感がさらに発達したもの。

これさえあればテストの選択問題なんて答えを見ているように解ける。数学なども計算式をすっ飛ばして勘で書いたものが正解になる。戦闘面においても抜群の有用性を発揮する。

観察眼（真）：EX（B）

神様から貰った技能の一つ。生前よりもランクが上がった。

物事の本質を見極めることができる。以前は仕事で交渉ごとをする時に無意識のうちに使っていた。

神性：A（- -）

神様の加護の力により、高い神性を得た。

カリスマ：A +（A）

生前からその誰もが見惚れるような容姿をしていた。そのため、一度見たら呪いのように引きつけられてしまう。神様のおかげで神々しさに磨きが掛かってしまった。

不老不死

神様によって不老不死となった。

アルトリアと仮契約、本契約することによって同様に不老不死になることが後に判明。

天才

ありとあらゆる分野において非常に高い能力を発揮できる。

## 空想具現化

自分が思い描いたことをそのまま現実には作用させる力。  
チート過ぎる能力。

## 直死の魔眼

転生した際に発現した能力。  
もともと才能があったうえに、死を体験したので使えるようになってらしい。  
脳が破裂しても再生するので、視ようと思えばどんなものの線や点も視れるらしい。  
さらに魔眼を最大限に使いこなす身体能力もあるから手に負えない。

## 才能

『るいは智を呼ぶ』という暁worksの作品に出てくる能力。  
出てきた才能は八つで、それは呪いと表裏一体の物となっている。  
原作では呪いは常に発動していたが、この作品では使用した才能

の種類と時間に応じて各呪いの発動時間が決まる。

・才能

『望みの未来を紡ぐ力』 『望みの未来を引き寄せる』

未来を予知するだけでなく、望む未来への道筋を見いだすことができる。

・呪い

『本当の性別を知られてはならない』

この才能は望んだ結果に応じて呪いの時間が決まる。

例えば明日偶然交通事故で死ぬはずだった人を、助ける程度だと1月位呪いの枷が現れる。

・才能

『思考の加速』 『思考加速』

時間の感覚を延長できる。加速できるのは思考のみで、肉体は通常のまま。反動で眠気が引き起こされる。

・呪い

『他者に助けを求めてはならない』

この才能は時間によって呪い発動の長さが決まる。

・才能

『身体能力の一時的な強化』 『身体能力の強化』  
能力は速く走ったりすごい力を出したりできる。反動で凄い空腹になる。

・呪い

『人と約束を結んではならない』

この才能は身体の強化具合と時間によって呪い発動の長さが決まる。

魔法世界に行ったときのネギ（闇の魔法の術式兵装の疾風迅雷時）位だと1時間使うと1週間くらい呪いが現れる。  
あまり使い勝手がよくないので滅多に使用しない。（魔力や気を使わないので関知されたくないときなどに使用する）

・才能

『運動の再現』 『運動の再現能力』  
他者の運動を寸分違わず正確に、自分の身体へコピーして再現する。  
どんな動きでも見たら、録画再生のようにぴったり再生できる。

・呪い

『通った事のない扉を開いてはいけない』

レベルの高い動きになる程、呪い発動の時間が長くなる。

神鳴流奥義・斬魔剣式ノ太刀を完璧に真似ると半月、呪いが現れる。

・才能

『道具を使いこなす力』

あらゆる道具の使い方を感じ取る。

パソコンみたいな用途の広い道具だと、かなりなんでもできる。はじめて銃を手にしても使うことはできるが、当てるのには技量や力も必要。

・呪い

『固有の名を呼んではならない』

使用した時間で呪い発動の長さが決まる。

10秒で10日くらい。結構使い勝手が悪い。呪文も唱えられないし。（無詠唱なら可）

・才能

『人の心を読む』 『心を読む』

実はそんなに細かく心を読むことはできない。嘘か本当か、どんな感情を抱いてるかぐらいしかわからない。慣れた相手、付き合いが深くなれば、色々わかるようになってくる。

・呪い

『人に直接触れてはならない』

心を読む深さによって呪いの長さが変わる。嘘か本当かを判別するくらいだと5日程度。

・才能

『感情の増幅』

目を合わせた相手のその時の感情を増幅する力。

・呪い

『光を浴びてはならない』

太陽の光を直接肌に当ててはならない。蛍光灯などの光は大丈夫

増幅させる大きさによって呪いの長さが変わる。

恐怖でなにも考えられなくする位のレベルだと約1ヶ月位。

・才能

『命の上乗せ』

人の命を奪って自らの『命』を延ばす力。

・呪い

『自分に関する本当のことを話してはならない』

上乗せした命の分だけ呪いが発動する。

しかし、もともと不老不死なので何かの理由で傷ができない時（魔力や氣が使えないなど）以外使うことはない。

アバター

コミュニケーション黒い竜と優しい王国で接続者たちが使役するもの。通常は5人1組だがこの作品では彼一人で操縦可能。ちなみに原作ではアバターが壊れると接続者も死ぬが、これはアバターに割いていた脳の部分がアバターの破壊により破裂することが原因であるためこの主人公には関係がない。



### 第3話 修行です（前書き）

今回はエヴァに会うまでの繋ぎみたいなものです。

主人公の能力の詳細が出てきます。

### 第3話 修行です

「ここが……」

『ネギま!』の世界に着いたみたいだ。

早速能力を試してみたかったのだが、周りの風景がおかしいことに気づく。

木や葉にはもちろん空気にまで線や点が視える。

本能的にこの線と点を理解する。

これは TYPE・MOON の作品に出てくる 遠野 志貴と  
両儀式 のもっている

直死の魔眼 である。

.....

.....

...

『落ち着きましたか？』

取りあえず人に会わないように森へ移動したら、神様から連絡があった。

目を閉じてもまわりに死が視えるので結構精神的にきつい。

『取りあえず魔眼殺しの眼鏡を渡しておきます』

そう神様が言うと目の前に眼鏡が現れる。

「コレの ON・OFF の切り替えも練習しなきゃね……」

『そうですね。この森に結界を張っておいたので此処でしっかり練習してください』

神様の気遣いに感謝し、私は早速修行をした。

- - - 修行1日目 - - -

先ずは、能力の把握から始めようと思う。

身体能力だが、コレは前世と変わらないようだ。

腕も全く筋肉がついていない。

このままでは満足にフライパンも振ることができないので、取りあえず魔力での強化を試してみる。

私はもとも魔力を持っていなかったのでコレの流れを感じるのは簡単だ。

体内の違和感を感じ取り、それを右手に集める。

「やった!!」

喜びのあまりガッツポーズをしまう私。

しかしそれがマズかった。

溜めていた魔力を握りつぶしてしまったため爆発。

結果私の右腕は跡形もなく吹っ飛び、周囲に甚大な被害をもたらした。

結局丸一日腕の再生に使ってしまったので、今日はあまり進歩しなかった。

.....

.....

...

- - - 修行2日目 - - -

おはようございます。先程重要なことに気づいてしまった私です。

それは - - - 名前です。

前の世界で使っていたのもあるけど、この際だから新しい名前が欲しい。

何かいい案がないかと考えているとふと、生前知り合いから言われた言葉を思い出して湖に移動して自分の顔を確認する。

……よし、変わってない。

水面には肩まで位の金色の髪を持った緑色の瞳の眼鏡美少女が映っていた。……自分で言ってる悲しくなるけどコレは私です。

……あ、今初めて言うけど私は男ですよ。

昔から他の男の子より高く、さらに筋肉が全く付いていない身体はどう見ても女の子にしか見えず、初見で男の子と見破られることはなかった。

ちなみに小さい頃は『僕』だったが、知り合いに勧められた Fa  
te / stay night というゲームのヒロインの一人のセイバーが『私』と使っていたのでそれを真似ていたら何時の間にかそれが定着してしまった。……そのせいで、さらに女の子扱いされただけ。

知り合いがこのゲームを勧めた理由は、私の容姿がセイバーと瓜二

つだったからだそうだ。

せっかくだから、このキャラの名前を使うことにしようと思う。

『神様あゝ。こつちの世界での名前決めましたよ。アルトリア・ペンドラゴンです』

昨日教えてもらった通信を使い、名前を報告する。

『ああ、……F a t eですか？』

『すごいですねー。神様何でも知ってますね』

『何でもは知らないですよ。知ってることだけ、って何言わせてんですか……』

本当に何でも知ってそうだ……。

『まあ、いいんだったら設定しておきますよ』



『ん、お願いします』

その後少し話して神様との通信をOFFにした。

さあ、やりますか!!

.....

.....

...

そうやって毎日のように特訓していると、あっという間に年月が過ぎていった。

さて、今までの成果をまとめてみよう。

先ず魔力と気を以前のように暴発させないで制御することができた。  
今なら無意識のレベルで魔力や気を使って身体能力を上げることができる。

魔法については……………うん、残念としかいいようがない。

魔力も気も充分すぎるほどにある上に世界の魔力を行使できるように神様にパスを繋げてもらっているのだ。

問題はそう……………精霊である。

今の私は事実上神様の遣いである。

人間はもちろん精霊達よりも立場的に上なので彼らは私を怖がっているのだ。

嫌われているわけではないと思うのだが、魔法を使うために精霊を使役しようとする緊張でガチガチに固まってしまっらしい。

気分的にはアレ……教育委員会や校長に自分の授業を見られてる教師的な？

とにかく魔法の使用は私に懐いてくれる精霊を探すしかない。

精霊のバックアップなしでも使えることには使えるが時間がかかること、魔力の無駄な消費、さらには制御の難しさ等を考えると宝具を使った方が余程効率がいい。

なので今私に許されている魔法は、身体能力強化、瞬動や虚空瞬動などの縮地類、純粹に物（木の棒や剣）に魔力や気を込めての強化くらいである。

次に宝具や魔術（Fateの世界の）だが、これらは使用する際にこちらの魔力で代用することができるとがわかった。

精霊などを使う必要がないのであればこちらは主流に使っていいと思う。

アーチャーや衛宮 士郎の投影魔術も使うことができる。

しかも彼らとは違い、剣以外も簡単に投影する事ができた。

ランクが1つ下がるのは変わらないが、アーチャーがやっていたみたいに強化の魔術で性能を上げればいいので問題ない。

後原作で遠坂 凛が士郎にぶっ放していたガンドは、私の場合数十年に渡って鍛えられたので原作以上のフィンのガトリングを打ち出せるようになった。

王の財宝についてゲート・オブ・バビロンはただ魔力を消費させればいいだけなので、特に問題はなかった。

そんな感じで宝具については特に大きな問題もなかった。

問題は空想具現化である。

この能力、思ったことがそのまま現実には作用する技なのだがコレが意外と難しい。

訓練中にゲームのこと考えてたら目の前にPCとソフトがあったと

きには、マジビビった。どれくらいビビったかっていうと、1週間完徹でゲームしてしまっただくらい。……べ、別にただゲームやりたかった訳じゃないんだからねっ！！　ただそのままにしておくのが勿体無かっただけなんだから！！

……ちなみにエネルギーは電気ではなく魔力という謎仕様だった。

ゲームをクリアした後はどうするか考えたが、F a t eの世界の魔術回路の起動時のようにON　OFFのスイッチを頭の中に作ることで問題をクリアした。

同時にこの方法が、直死の魔眼の制御にも有効だったのはうれしい誤算だった。

魔眼の制御ができたので眼鏡もはずすことができた。

取りあえず直死の魔眼は線や点を正確になぞったり突いたりするための技術が必要だったので、必死になって修得した。

ナイフだけだと心許ないので、投影魔術や　ゲート・オフ・バビロン　王の財宝による武器による点への射出、魔力で編まれた糸による線の切断などの練習もした。

魔力の糸を編んだときに思いついたのがセイバーが付けていた鎧である。

何年もの月日をかけて瞬時に展開できるように開発した。

この鎧だけで並みの中級魔法程度じゃ傷すらつかなかったと思う。

るい智の才能については思ったよりも使い勝手が悪いのであまり多用しないようにしようと思う。

最後はアバターだが――正直コレはやバかった。

アバターを召喚するときは、こちらの魔力でいいらしい。

どうやら最初に必要な魔力を私から吸収して、物理干渉力を持った実体が現れるっぽい。

並のアバターだと大したことはない。強かったとしてもラカン式強さ表風にいえば6500くらいだろうか。

問題は原作で人類最大こと比奈織 カゴメのAvatar、ステイングだ。

一度アレを使つて操作をミスつて自分に突っ込ませたことがあった。

そのときは私が展開できる限りの最高の魔法障壁及び物理障壁と気での全開気合い防御、魔力で編んだセイバーの鎧、投影魔術で投影した 熾天覆う七つの円環ロー・アイアスまで使つたのに全部紙のように切り裂いた。

なんとか体を捻らせて避けたが衝撃波によつて身体が上下に分裂。

普通なら即死級の怪我だが不老不死なので死ぬことはない。……といつても下半身が消し飛んだので簡単には再生できないが。

回復魔法も使えないので何かないかと考えてたらセイバーの剣の鞘があることを思い出す。

痛みで呻きながら私は全て 遠き理想郷アヴァロンを展開して事なきことを得た。

その後何度かステイングを出したが、細かい操作は無理だった。

下手に軌道を変えようとするともたあの悲劇が繰り返されることは明白だ。

よっぽどの事がないとき以外は使わないようにしよう。

『エヴァンジェリンが吸血鬼化してから十数年経ちました』

「ぶふうー！ー！ー！」

神様からの突然の報告に紅茶を飲みながらここ数十年の成果を確認していた私は、それを吹き出してしまった。

『？ どうしたんですか？ 突然吹き出して』

『突然吹き出したのは貴女のせいですよ！！ ってそうじゃなくて  
！』

イスから立ち上がって出かける準備をしながら神様に聞く。イスから立ち上がって出かける準備をしながら神様に聞く。



『今エヴァが何処にいるかわかりますか？』

過ぎたものは仕方がない。神様を責めようにも時期を聞かなかった  
自分も責任はある。

『そうですね。今貴方がいる森の入り口付近にいます』

その言葉を聞いて私は家を飛び出した。その言葉を聞いて私は家を  
飛び出した。

## 第4話 吸血鬼の真祖（前書き）

やっとエヴァを登場させることができました。

心なしかエヴァがキャラ崩壊してる感が否めない……。

## 第4話 吸血鬼の真祖

Side エヴァ

私の名前はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル、吸血鬼の真祖だ。

好きでこんな身体になったわけではない。

10歳の誕生日に起きたときはもうこの身体だったんだ。

私は私をこんな身体にした奴を殺し、各地を転々と放浪していた。

何時までも一ヶ所に留まっていると魔女の疑いをかけられてしまうからな。

私は住んでいた城から出たことがなく、最初の数年こそ勝手が分からなかったが今では一通りのサバイバル技術を身につけている。

それにここ数年は一度も追われておらず、そろそろ襲撃されなくなってきたかと思っていたのだが、甘かった。

朝、宿で寝ているときに突然襲撃があったのだ。

私はとつさに展開した障壁で難を逃れたが、私以外の人は流れ弾に当たって死んでしまった。

「失礼する。ワタシは、立派な魔法使い《マギステル・マギ》だ。貴様を魔女として捕らえにきた」

ちっ……面倒なのがきたな。

心の中で悪態を吐きながら一般人を巻き込まないように森へ移動する。

……………それが罠だとも知らずに。

S i d e  
O u t

S i d e 立派な魔法使い（笑）

異端の魔女を森に追いやることに成功。

『そっちに行ったぞ』

仲間に念話で連絡をし、ワタシも森へ向かう。

「フフツ、楽しみだ……」

S i d e  
O u t

S i d e    アルトリア

こんにちは、アルトリアです。

神様からの報告を受けて、森の入り口付近に来てみると何やら騒がしいです。

念のため魔力や気を遮断する結界を作り、そこで様子を見る。

数人のローブを被った魔法使いっぽい人がいる。

あ、なんか足下に金髪の少女がいる。

……あれ、エヴァじゃね？。

よく見てみるとその少女は私が探していたエヴァンジェリンだったのです。

取りあえず介入の準備をしようと思う。

顔を見せたくないので服装はセイバーオルタにしようと思う。

今まで着ていた服にかわって赤い血管のような模様がはいった黒い鎧を展開する。

ちなみに私はそれぞれの服装に様々な能力を付加させている。

オルタの鎧は通常よりも遥かに筋力と耐久が上がる代わりにスピードが落ちる、といった感じに。

闇の魔法の鎧バージョンみたいな感じだ。

顔にオプションでつく仮面っぽいのは、私のアレンジで最高峰の認識障害が掛かっている。

右手に 約束された勝利の剣エクスカリバーを出現させる。

通常の 約束された勝利の剣エクスカリバーとは違う赤と黒で構成された聖剣がでてきた。

コレで準備は完了。

――さて、

「行こうか」

私は思考を切り替え、相手を殺すことに専念する。

S i d e O u t

S i d e エヴァ



しくじった。

今思えば町であんなに派手な攻撃をしたのに、その後あまり追撃がないのも妙だった。

森に誘われていると気づいたが時すでに遅く、不意をつかれて捕縛結界に捕まった上に不死殺しの武器で傷をつけられた。

完璧に平和ボケだ。

「フフッ……最初の攻撃を完璧に凌いだのでどんな高位の化け物かと思っていれば……まだこんな子供だとは……」

「ぐ……」

嘲笑うようなその声に答えることもできない。

髪をつかんで持ち上げられ、

「貴様のような異端を生かしておくわけにはいかない。……死ね！」

その言葉とともに魔法が放たれる。

（あ……死んだ……）

避けることができない攻撃、私は死を覚悟したが

「約束された……勝利の剣《エクス……カリバー》！  
……！」

その声と共に感じた莫大な魔力に目を見開く。

目の前を漆黒の極光が通り抜ける。

辺りにはなぎ倒された木々やもはや原形をとどめていない魔法使い

達が転がっていた。

助かったのは私に語りかけてきた魔法使いくらいだろうな。……まあ、助かったといっても体中から血を流し、すでに満身創痍だが。

呆然としていると足音が聞こえた。

先程の攻撃の主だろう。そちらの方に顔を向ける。

そいつは赤い血管のような模様がはいった黒い鎧を身につけている。

顔につけている目を覆う仮面のようなものは、強度の認識阻害でも掛かっているようだ。正直私ですら相對しているのに正体が分からん。

その黒い騎士は生き残った魔法使いに近づいていた。

怯えている魔法使いに剣を突きつけ

「さあ、貴様の罪を数えろ」

思っていたよりも遙かに若く、女性のような声でそう宣言した。

S i d e O u t

S i d e アルトリア

やっべー……あつぶねー……

エヴァが危なかったからとはいえ、冷静に考え見ると 約束された  
勝利の剣エクスカリバーを使うのはどうかと思った。うん。

一歩間違えれば全部消し飛んでたんじゃないかな？

とっさに威力弱めてよかったー……。

おっと、こんなことを考えてる場合じゃないな……。

私は生き残った魔法使いに近づき、

剣を突きつけながら、某仮面ライダーのセリフをセイバーオルタに似合うようにアレンジしたものを宣言する。

このクソムシは先ほどの一撃ですっかり怯えてしまったらしく、何も喋らない。

さて、どうやって殺そうかな。

空想具現化使ってもいいし、アバターで捻り潰してもいいんだよねえ……。

あ！　そういえば5年くらい前に遊び半分で作って人に試してないやつがあったなあ。……使ってみますか。

「アルトリア・ペンドラゴンが命じる……『死ね』」

私がそう命令するとこの男の目の光が消え、一種の催眠状態になる。

男はローブの内側に隠していたナイフで自らの喉を裂いて死んだ。

ふふふ……これは私が生前見ていたコードギアスを参考に遊び半分で作った能力。名前はそのまま　ギアスである。

先ず世界とのパスを接続して世界そのものに話しかけられるようにする。

これにより私から発せられる言葉は「世界」からの命令と同義になる。

原作とは違い、視覚ではなく聴覚から侵入する。

それから逃れるためには完全に音を聞こえなくする（ただしこの弱点については相手の脳に直接命令する事で克服されている。念話妨害されるとどうしようもないが）か、

強靱な精神力で耐えるしかない。

発動条件は私の本名を唱えることと

ギアスを掛ける相手を私本人がしっかりと認識することである（認識しないで使ってしまうと声が聞こえる範囲に効果が及んでしまうため）。

コレ、結構楽でいいね……。

今度からコレを多用しよう。

実験も終わったので取りあえずエヴァのところまで行く。

うわぁ、結構酷い傷だねえ……。不死殺しの効果のお陰がぜんぜん再生してないし。

んー、取りあえず……

剣の鞘を展開させてエヴァを治療する。

「な……！？」

何か驚いてるエヴァちゃん。……可愛すぎると思う。お持ち帰りしたいです。

数十秒後、エヴァの外傷は全て元通りになっていた。

「お前……何故私を助けた？」

エヴァから問われる。

……さて、なんて答えましょうかねえ？



S i d e O u t

S i d e エヴァ

いきなり目の前に現れたと同時に魔法使い達を瞬殺し、生き残った奴にはなんだかよくわからない事をして自殺を促す。

おまけに不死殺しでつけられた傷を何か鞘っぱいもので全快させた。

本当に何者なんだこいつは……………。

「お前……………何故を助けた？」

このままでは埒があかないので聞いてみることにした。

「あー、ちょっと待ってねー」

奴は軽い口調でそう言って黒い鎧と仮面を消した。

やはりあの鎧は魔力で編まれたものだったか……。

吸血鬼である私は魔法と関わり始めてから、すでに10年以上の歳月が経っている。

それなりに才能もあったのでそこそこ高位の魔法使いである私は、それを見抜くことができた。

取りあえず今はこいつのことに集中、って……

「なっ!!!?」 / / /

思わず赤くなってしまった私は悪くない。

認識障害を解除してそこにいたのは、絶世の美少女だったからだ。

年齢はだいたい……14くらいだろうか。

朝日を浴びて黄金に光る肩まで伸びた髪。透き通るようなきめ細かく光を反射する真っ白い肌。どのような宝石にもない淡く深いやわらかい瞳。

全てが精巧に緻密に計算されているようなその容貌は、人よりも寧ろ人形の近い。

その姿は男も女も精霊も悪魔も、おそらく神でさえ見惚れるだろう。

しばらくポーツと見つめていると

「おーい……大丈夫ですかー？」

この少女に声をかけられた。

「ひゃっ！？ ひゃいつ！！？ だ、ただ大丈夫でしゅう！！！」

／／／

あああああああああ！！！！！！／／／勢い込んで昔の口調に戻ったあげく、嚙んでしまった！！恥ずかしい！

「カフツ」ビシャア

何故か吐血する美少女。

「お、おい！！！！大丈夫か！？」

倒れた美少女を抱きしめるが

「幼女……最k……グフツ」

と、私に聞こえないくらいの大きさに呟いて倒れた。

結局こいつの事については何一つわからなかったような気がするな……。

辺りを見回すとあたりに散乱している木々に挟れた大地、数人分の肉塊とおびただしい量の血、吐血して倒れた美少女に私。

……取りあえず木陰に移動するか。

S i d e O u t

## 第5話 エヴァとアリア（前書き）

なんか、場面が飛びすぎというか説明が下手というか……。

アルトリアがなんか怖いです。聖杯戦争だとバーサーカーで召喚されそう……。

主人公の過去についてはいずれ書く予定です。

## 第5話 エヴァとアリア

Side アルトリア

「と言うわけで、これからよろしくね」

「おい待て！ 何が言うわけだ！ 何も説明してもらってないぞ  
！！」

と、怒るエヴァちゃん。

説明が面倒だったから省こうと思ったが、やはり止められた。  
……  
エヴァちゃんって結構真面目だね。

何故エヴァがこんなに取り乱しているかを回想してみよう。

では……………回想スタートです。

.....

.....

...

まどろんでいた意識が覚醒する。

私がエヴァちゃんの攻撃（精神的な）によって血の海に沈んでから  
3時間くらい経ったらしい。

目を覚ましたときに木陰でエヴァに膝枕をしてもらってることを把



握したらまたダメージを負いそうだった。……エヴァ、恐ろしい娘！！

再び迸りそうになる液体を抑えつつ、私は体を起こす。

「おい、お前大丈夫か？」

そんな時エヴァちゃんが私に話しかけてくれました！！よく通る高いソプラノボイス。容姿に会わない尊大な口調。全てが魅力的です。……あ、やべ……。

油断していた私の口から熱きパトスの結晶が溢れ出してしまいました。こふっ……

「おいイイ！！ 本当に大丈夫か！？」

大丈夫……。大丈夫だからもうちょっと離れてお願い。

このままじゃさっきの二の舞になるので、私は急いで意識を入れ替えて言う。

「取りあえず、ここじゃアレだし私の家行こっか……」

エヴァは吸血鬼の真祖で。私は先程のパトスの流出で。

何でもエヴァは、真祖ではあるがまだ吸血鬼としての弱点は残っているらしい。

光とか浴びたりニンニクを食べたりしても、完全に消滅してしまうことはないがかなり肉体的には辛いんだとか。

私は言わずもがな、2度に渡る萌をエンチャントさせた精神攻撃が原因だ。

理由は違うが2人とも今外にいることは危険だ。

「それはいいが……」

言いよどむエヴァ。やっぱりまだ警戒されてるのかな？

……まあ、仕方ないよね。助けるためとはいえ高位の魔法使い達、一瞬で片付けたし。

そう思っていたのだが……それは杞憂だったみたいだ。

「私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ。……お前は？」

「……ああ」

そういえば自己紹介するの忘れてたね。

律儀な言動に思わずはにかんでしまう。

「私はアルトリア・ペンドラゴン。よろしくね、エヴァンジェリン」

その言葉と共に、私は手を差し出した。

.....

.....

...

そして家についたところで今に至る。

流石に原作知識があることを言うわけにはいけないので、なんとか誤魔化さなければならぬ。

取りあえず直球勝負を持ち掛けてみたがあっさり突っ込まれた。

意外と真面目ちゃんだよね、エヴァちゃんは……。

さて……どうしようかな。

この金髪幼女相手だと中途半端な嘘は見抜かれるだろうし、それが原因で警戒心を煽ってしまったら元も子もない。

現状での最前手は……おそらくコレだ。

「仲間がほしかったんだ。私も不老不死だし。」

不老不死というハンデはどうしても普通の人間と生きて行くには大きすぎる障害となる。

必然的に私たちのような人外は人間と関わることをしないようになり、孤独に陥ることが多くなってしまふ。

だから不老不死であるエヴァにとって唯一見つけた同胞だ。恐らくエヴァちゃんは喰いつくだろう。

案の定エヴァちゃんは私が不老不死であることに驚きながらも興味を持ったようで、その後少し話しあってエヴァちゃんと一緒に住むことになりました。

取りあえず、エヴァちゃんの実力を見ておきたいなあ。

.....

.....

…

エヴァ（最初はエヴァンジェリンちゃんと呼んでいたがエヴァちゃん  
が、エヴァで良いと言ったので呼び捨てになった。）と一緒に暮  
らすようになった翌日、私は自分の家の庭の訓練場へ彼女を連れて  
行った。

「こんな所で何をするんだアリア？」

と、エヴァが聞いてくる。

アリアというのは私の略称である（エヴァに愛称で呼んでもいいと  
言われた時に、私の方も という流れになったのだ。最初は『アル  
ト』リアで アルトにしようと思っても考えていたのだが、しつくり  
こなかったので『ア』ルト『リア』で アリアにした。アルトリア  
も女性名だし）。

「んー？ ああ、取りあえずエヴァの実力を見ておこうと思ってね」

エヴァの問いに答えながら体の重心を落とす。

これから一緒に暮らしていくなら相棒の強さはある程度知っておかなければならない。

まだ魔法使いとして未熟であるエヴァの今後の教育方針を決める良い機会でもあるし。

「なるほどな。確かに戦力の確認は必要か……………では、全力で行くぞ！」

その言葉と共に無詠唱の氷の魔法の射手を数本放ってきた。

私は右に大きく避けることでそれを回避、取りあえず様子を見ることに専念する。



流石に全力で戦うと力の差がありすぎるので、投影魔術によると黒鍵の投影以外を使わない縛りで行こうと思う。

さて……どこまで出来るかなエヴァ？

S i d e O u t

S i d e エヴァ

アリアとの模擬戦が始まったがこちらの攻撃がいつこうに当たらない。

十数年ほどだが魔法使いとして私はそれなりの強さを持っていると自負している。

だが目の前のこいつは私を追っていたそれなりに高位の魔法使い達を一瞬で消すことができる実力の持ち主。

普通的手段で勝てるわけがない。

しかしアリアはどうやらまだ真面目に戦う気が無いらしく、攻撃を仕掛けくる様子がない。

経験、実力共にスペックでは完全に劣っていることは明白。

勝機があるとしたら、それは最初の一手だ。

油断している時に一気に畳みかけるしかない！

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック  
来たれ氷精 大気に満ちよ 白夜の国の凍土と氷河を こおる大地！」

アリアの足下を凍りつかせ、動けなくする。

「魔法の射手 連弾・氷の17矢！」

続いて無詠唱の魔法の射手を時間差をつけて数個ずつ放って時間を稼ぐ。

アリアはこの攻撃を避けずにいつの間にか手に持っていた細長い剣で軌道をそらして防御した。

この程度の攻撃をそらしている事を考えると、障壁の類は展開していないだろう。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック

来たれ氷精 闇の精 闇を従え吹けよ常夜の氷雪 闇の吹雪！」

中級レベルの呪文だが魔法の射手よりも遥かに物理破壊力の高い魔法。

さすがに正面から喰らうのはマズいのか動こうとしていたが、私の魔法で足が凍って動けないようだ。

アリアは動けないながらも体を捻り直撃は回避できたが、その代わり身体を守るために突き出した細長い剣と右腕がズタズタで使い物にならなくなっていた。

その姿に私は勝利を確信した。

S i d e O u t

S i d e アルトリア

見くびっていた。慢心していた。油断していた。

開始直後から単調な魔法の射手の連弾。ずっとそればかりで飽きてきたのでそろそろ決めようと思っていたら、いきなり こおる大地

を喰らって動けなくなった。

そこに時間差で 魔法の射手が放たれたが、コレをとっさに投影した黒鍵でそらす。

「……………闇の吹雪!!」

なんとか防いだ矢先、中級呪文が私に向かってきた。

足が固定されているため回避は不可能……一瞬でそう判断した私は、体を捻り少しでも威力を和らげるため黒鍵を突き出した。

その結果黒鍵はボロボロ、右腕に至っては関節一つ動かすことができない。

肉を裂き、骨が露出しているその腕を見て昔を思い出す。

「ふ…………ふふ、はは」

赤い赤い赤い赤い紅い赤い紅い朱い朱い赤い朱いあかい赤い紅  
いアカいアカいアカい紅い紅い赤い紅いアカい赤い朱いアカい赤い  
あかい赤いあかい赤い朱いアカい紅い朱いアカい赤い紅い朱いあか  
いあかい - - - -

- - - 笑いながら黒鍵を構える。

「はは…は、ふふ」

- - - エヴァが異変に気がついたようだけれどどうでもいい。

イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ  
イタイイタイイタイイタクテイタクテイタクテイタクテイタクテ  
タクテイタクテイタクテイタクテ

- - - 視界に線と点があらわれるがどうでもいい。その意味なんて  
わかりすぎるくらいに理解している。

「は、はははっ！ はは！」

イタイイタクテアカクテアカイカラ  
- - - -

[illegible]

壊れたように笑いながら黒鍵を投影して投擲、エヴァに接近する。

「ちい！ リク・ラク・ラ・ラック・ライラック  
来たれ氷精 闇の精 闇を従え吹けよ常夜の氷雪 闇の吹雪！」

突然の豹変ぶりに混乱しながらも、エヴァは魔法を放つ――  
 が、黒鍵を巻き込んだその魔法は、私に直撃する前に消滅する。

「なに!？」

驚きを隠せないエヴァに向かってさらに数本黒鍵を投擲、エヴァの避けるルートを限定する。

「やつほー、エヴァアー!!」

予測通りの場所へ逃げたエヴァに拳を放った。

「ぐ! じふっ…」

間髪入れずにお腹を押さえてうずくまるエヴァの頭へ、流れるような動作で蹴りを打ち込む。

彼女は満足に受け身もとれずにゴロゴロと転がってそのまま動けなくなっただ。

「あれー? もうダウンしちゃったのーエヴァちゃん?」



呼びかけてみるが反応なし。……こりゃ完璧に気絶しちゃったな。

まあ、私も満足できたし良いかな。正直痛みと疲労で立ってるのも辛いし。

戦力の確認の方は……及第点かな。

魔法使いとしてはそれなりのレベルだ。

これ以上はひとまずエヴァが原作でネギに選択させていた、前衛型か後衛型かを選択するまで決められないかな。

私はそう結論するとエヴァを担いで家へ帰った。

……あ、腕の怪我治すの忘れてた。

## 第5話 エヴァとアリア（後書き）

学校が始まったのでかなりの不定期更新になりそうです。

マジだりい……。

## 第6話　すくすく　えう、あたんにつき（前書き）

すいません遅れました。

今回はちよいエロ入ってます。ご注意ください。

今思っただけど才能と呪いいらなくね？　まあ、なくしませんが

……

後前半と後半で主人公の口調が変わってる気がしないでもない。

## 第6話　すくすく　えっ、あたんにっき

S i d e     アルトリア

エヴァをボコボコにしてから1週間ほど経った時のことだった。

目が覚めたときこそ怖がっていたが今では慣れたらしく、よそよそしさもなくなっていた。

「はあ？　修行したい？」

「ああ、先日のことで自分の力不足がわかったからな」

エヴァの答えに納得する私。確かに今のエヴァでは私が力を振るうときに邪魔になる可能性が出てくる。

だから修行するという案には賛成だが一つ問題があった。



ちなみにエヴァは取りあえず後衛型の魔法使いを選んだ。

まあ、強くなってくると前衛や後衛の線引きはあまり意味がないし、私たちは時間がたつぷりあるので焦らずに強くなっていけばいい。

「魔法については家の物置にかなり魔法書があったと思ったからそれを参考にしてねー」

「ああ。礼を言うぞアリア」

そう言って物置へと向かうエヴァ。

それを見届けて私は庭へ出て自身の研究を始める。

「投影、開始」

イメージするのは某剣の英霊の黄金の剣。私が持っているオリジナルのエクスカリバーも出して2つを見比べる。

- - - 取りあえず及第点かな。

10割とまではいかないが8〜9割の神秘を再現することができた。時間をかければ10割の再現も可能だろう。

今後の課題はもつと息を吸うように投影を完璧に成功させること。今のままでは黒鍵はともかく、宝具を実戦で満足に使うことはできない。

私は投影した剣を置き、新たに 遠野志貴の使っていたナイフを投影する。

頭の中のスイッチを切り替え、直死の魔眼を発動させる。

私の視界は死にあふれ、文字通り『死海』となる。

どうやら今の私は精霊などに近いらしく、周りの自然等の風景は最初から明確な『死』を視ることができた。……まあ、元 人間なので人の死も理解することができただが……。

実は私はこの眼を完全に制御する事ができないらしく、エヴァと戦ったときのようにテンションMAXになると自動で発動してしまう。

前世から少し殺人衝動が強かった私なので、仕方がないと言えば仕方がないだろう。

何もしなくても日に日に殺人衝動が溜まっていくので定期的に発散させなければならない。

この間の狂化も衝動抑え込んでたからってのも原因の一つだし。

暴走してエヴァを殺すとか勘弁だなあ……………。

そんなことを思いながら身体強化を使わずに周りの木々を次々と殺していく。時折ゲームで見た七夜つばい体術を駆使したりもする。

……………



……

…

「ふう……終わり」

鍛錬が終わった後、周りは倒れた木々で埋め尽くされている。

それらを火葬式典を付与した黒鍵を複数投げ刺して燃やす。更にほかの所に火が移らないように障壁を展開。

緑が生い茂っていたそこは一瞬にして不毛の荒野となり果てた。

やべえ……やりすぎた。森が一部だけ禿げあがってるよ。

まあ、百年くらいすれば元に戻るだろう。直死も木にしか使ってないから、地面は生きてるし。

そう思って私は家の中へ入った。

次の日からエヴァとの修行の日々が続いた。

取りあえず内容を少しだけ説明しておこう。

- - - 回想開始 - - -

「私は魔法が使えないので、戦闘における立ち回り方を教えます。これを知るだけで何倍も戦略が立てやすくなりますからね」

「それはいいんだが……何故敬語なんだ？ 更に何故メガネ？」

「それは私が形から入るタイプだからです！ 今の私はエヴァの師匠、つまり先生だからですよ！ ……それとも似合っていないかな？」

「ッ！？ い、いや！！ 似合ってるぞアリア！！」／／／

「そう！？ ……よかったあ」

「はうう……。か、可愛すぎるう」／／／

「ありがとー！ エヴァも可愛いよー！！！！！！！！」

「うわっ、アリア！！ いきなり抱きつくな！！ ってグリグリするなあー！！！！」／／／

「今日は修行終わりっ！！ 一日中エヴァを愛でますっ！！」

「アホかあああああ——————!!!!」 / / /

「き、昨日は取り乱してゴメン……」

「ああ、もう気にしてないからいい……。というより『こおるせかい』をまともに喰らってピンピンしていたときはさすがに恐怖を感じたぞ……」

「あー……ぶっちゃけると自分でも驚いたよ……。それに殺人衝動を性欲に変えることができるのも驚いた……」

「殺人衝動？」

「ん？ ああ…言うてなかったねえ。文字通り人を殺したくなる衝

動のこと。溜まりすぎると爆発するんだよ。」

「それってこの前の……………」

「そうそうアレアレ。まあ、最もあの時はその前に久しぶりに殺して興奮したからその余波って感じ……………ってエヴァ聞いている？」

「……………」

「ってエヴァ気絶してる！？ そんなにあの時のこと怖いのか……………」

「

「……………」

「取りあえず……………今日は終わろうか……………」

「それじゃあ、今度こそ始めようか」

「それはいいんだが、昨日私が何をしていたか知らないか？ 全く覚えてないんだが……」

「ト、トラウマ……」

「はあ？ トラウマだと？」

「何でもないよ……。エヴァ、そのままの君でいて……」

「？」

「取りあえず！ 前も言ったように立ち回りを教えるよ」

「あ、ああ……」

.....

.....

...

「よし！ まあ、基本はこんなところかな。後は実際に闘っていると  
きに自分の中で最適化するしかないね」

「助かったぞアリア。今日はこれで終わりか？」

「うん、そーだよ！。明日から私と戦闘訓練かな」

「えゝ！？ .....」

「あ！？ ちょっとエヴァ戻ってきて！！ エヴァ、エヴァー――  
――！！」

「はっ！！！？ 何だ？ 何かあったのか？」

「んーん！ 何でもないよ！ 何もないから！」

「そ、そうか.....」

――回想終了――



……なんか思い返してみれば半分以上私がエヴァの所為で中止にな  
ってる気がしないでもない。

あとあの時の私そんな怖かったの？ エヴァなんか思い出さないよ  
うに記憶を封じて留みたいだし……

話は変わることになるがエヴァは飲み込みが速く、とても優秀な生  
徒だったので教えている此方も楽しかったのを覚えている。

5年程で家にあつた全ての魔法を習得し、尚且つ自分でも新しい魔  
法を編み出しているようだ。

私は相変わらずこの世界の魔法が使えないが、投影魔術を完璧にマ  
スターした。手始めに『無限の剣製』アンリミット・フレイドワークスを使ってみたが……私の種  
族が精霊な為か維持にそれほど魔力を必要としない。

今までの修行からこれが私の戦闘方法だ。

対人戦……自身の肉体、投影魔術による黒鍵、ガンド等の魔術

対軍戦……宝具、アバター

対空間戦……固有結界、空想具現化

……なんだこのチート。世界と繋がっているから魔力も無限っぽいし……。

今なら創造主だって瞬殺できる気がする。もっているはずだし早めに殺しておこうかな……。

原作ブレイクを考えると、エヴァが私の寝室にやってきた。

「ア、アリア……少しいいか？」／／／

「ん……どうしたのエヴァ？」

彼女の顔は薄暗い部屋でもはっきりとわかるほどに真っ赤になっていた。

何となく予想がつくがそれを言わずに微笑みながら話を聞く。

さて……どうするのかねえ彼女は……。

S i d e  
O u t

S i d e    エヴァ

「ア、アリア……少しいいか？」 / / /

私は夜、アリアの寝室へ訪れた。

理由はその……あれだ、わかるだろ。というかわかれっ！ 仮契約の事だ。非常に不本意なことであるが私はこいつに惚れてしまったらしい。

だから自分の物にしたい。問題なのはこいつが女であるという事なのであるが……これは聞いてみるしかないだろう。

「あのな……お前はその……ど、同性愛をどう思う？」

「はい……？」

キョトンとしているアリア。

「だから同性愛をどう思う？」

再度言い直す私。彼女は一瞬悪戯を思いついた子供のように笑ったが、変な質問をして嫌われていないか等と考えていてそれには気づかなかった。

「んー……正直に言えば……」

「い、言えば……？」

「ない」

それを聞いた瞬間、私は何も考えられなくなる。彼女は否定どころかその言葉に嫌悪感すら出していた。私の思いが、私の感情がたったの2文字で否定された気がして、

「いや、別に同性愛を否定する訳じゃないよ。ただ私にウザたい

感情向けてこなければだけどね。ふふ、ねえエヴァもそう思わない……？」

「ひっ、……ぐすっ……ひう」

気がついたら泣いていた。

「はっ！？　ちょ……エヴァ！？」

数十年生きている私だ。思えば後にも先にも私を本気で泣かした奴はコイツだけだったかもしれん。

必死でご機嫌をとろうとアリアが何かにかと言ってくるが、最後の抵抗とばかりに顔を俯かせて逃げる。

「あー……もう！　エヴァ聞いて！！」

アリアが私の腕を掴みながら“それ”を言った。

「私は……実は男なんだけどっ！」

「やあっ!! ……って、え？」

彼女の口からあり得ない言葉が出てきてフリーズする私。

……え？ 男？

S  
i  
d  
e  
  
O  
u  
t

S  
i  
d  
e  
  
ア  
ル  
ト  
リ  
ア

沈黙。痛いほどの沈黙が辺りを包む。今夜は風がかなり吹き付けていたはずだが空気を読んだのか窓がぴくりとも揺れない。何だテーマ風だけに空気読みましたってか？ おもしろくねーよ出直してこい。

あーあーあー、何か口調が崩れてる気がしないでもない。セイバーの口調真似るよう努力したけど結局一人称しか身につかなかった件について。

「え？ 本当に、お、男なのか？」

「ホントホント。私男。立派なナニもついてる」

「いきなり下ネタをかますな！！……後口調変わってないか？」

はい、変わってます。でもこっちが素だからね？ 頑張って納得して。



そう言うとエヴァは頭を抱えながら渋々うなずいた。

「それで……何で最初に男だと言わなかったんだ？」

彼女はぐったりとしながらも聞いてきた。むっ、やっぱり律儀な娘だよ。えエヴァちゃんは。

「えーと……そっちの方が面白そうだと思っ……………」

そういった刹那、私でも知覚できないスピードで何かが私の横の空間を切り裂きながら通過していった。

ちよ、ナニあれ？ 私が直感で避けてなかったら死んでたよ？ ベツドが粉々なんだけど……。つーが見えないってどんだけー。

即死級の攻撃を躊躇いなく実行したエヴァをたしなめようとそちらを向くと

そ  
に  
こ  
は  
鬼  
が  
い  
ま  
し  
た  
。

「ひッ!!」

悲鳴も上げながらも理性を保っている私は結構すごいと思う。

目の色が反転し、体には圧倒的な覇気を纏い、隙あらば此方を亡き者にしようとしている。不老不死になってから初めて死を覚悟した。死なないけども。

「おもしろ、そう、だった、から、だと？」

「エヴァ落ち着いて。私達は話し合えるはずだよ。後その話し方怖い」

必死に説得に掛かるも、

「そうか、では……O H A N A S I ショウカア？」

「怖っ！！ つーか何か字が違う気がする！？」

「シぬガイい！！」

「きゃあああああああ————！！！！！！」

コレが人生で初めて恥も外聞もなく上げた悲鳴でした。

「はあ.....はあ、はあ.....し.....しぬ」

...

.....

.....

手を膝に当てて息を整える。なんだあの人外、闇の魔法とかチートすぎる。

『闇の吹雪』取り込んだら打撃に氷属性がついて尚且つ当たった瞬間魔力を吸収するオマケ付き。

『こおるせかい』は取り込んで空気中の水分、ひいては私の体内の水分まで凍すし。

闇系の超広範囲殲滅呪文を取り込んだときなんか、夜だし影という影からエヴァが転移してきて手に負えなかった。

殺す気でやれば何とでもなるが流石にそれはイヤだ。取りあえず一瞬の隙について目くらましを使い逃亡、影分身を使って何十にも分かれる物量作戦を実行。

まあ、気休め程度の物だが考えをまとめる時間くらいはあるだろう。

解決策は正直思い浮かばない。が、そうも言ってられない。長くても朝日が昇り明るくなるまでには何とかしないとこれほど派手にやっているのだ、誰かが気づいてしまってもおかしくはない。

さて……どうし」  
—————ッ！———」

うわっ！ 気づかれた！！

つーか最早人語を話してないんだけど……。大丈夫なのかあれ？  
闇の魔法の副作用とかじゃないの？

まあ、もうそろそろ終わらせますかね……。

私は黒鍵を左右の指の間全部に作り出し、それを投擲する。鉄甲作  
用で投げている + 障壁貫通付与をしているので、エヴァは黒鍵  
を避けるしかない。

生じた隙は一瞬だ。しかし、達人同士の戦闘で1秒でも止まること  
は死を意味する。

私は瞬動で彼女の頭上に移動、上から地面へ叩きつけた。

そのまま彼女のところに落ちる。

「エヴァ」

彼女に跨りながら名前を呼ら、その声に反応するように目を開いた。完全に出はないにしろ、彼女が冷静になったので幾分か狂気が収まったようだ。

「アリア……お前、は……」

何とか一件落着くかと思つてるとエヴァの悲しみのこもった声が聞こえた。

「なあ、お前は私のことが嫌いか？」

そういえばそうだった。全然全く解決などしていない。寧ろここからが本番である。ここでミスってしまえば全てがパーだ。……元々私の所為だけだ。

「ん、私も答えて欲しいんだけど……えーと……エヴァは私のことが

好きってことで良いんだよね？」／／／

流石に自分からこういう事を言うのは恥ずかしいが今回は全面的に私が悪いので仕方がない。

「あ、ああ。だから最初にあんなことを聞いたんだが…／／／…  
…その顔を見るにトラウマだったようだな……」

肯定だ。男にもてるなどなんの意味があるのか？ 吐き気がするわ、おえっ。

「エヴァのことは嫌いじゃないよ。寧ろ愛してます。エヴァたん萌え」

「ほ、本当か！？ な、なら……ぱ、パク、仮契約してください…  
…」／／／

ごふっ……！ はにかみながら頬を染める顔を見て、久しぶりに感じた謎の波動の所為で吐血しそうになるが、下にエヴァがにいるので気合いで押さえ込む。



エヴァが仮契約の魔法陣を描き終わり準備も終了。ちよこんと座って真っ赤になりながらも唇を少し上に突き出す仕草がたまらなく可愛い。これがあれば私は「エヴァのことは嫌いじゃないよ。寧ろ愛してます。エヴァたん萌え」

「ほ、本当か！？　な、なら……ば、パク、仮契約してください……」  
／／／

ごふっ……！　はにかみながら頬を染める顔を見て、久しぶりに感じた謎の波動の所為で吐血しそうになるが、下にエヴァがいているので気合いで押さえ込む。

エヴァが仮契約の魔法陣を描き終わり準備も終了。  
ちよこんと座って真っ赤になりながらも唇を少し上に突き出す仕草がたまらなく可愛い。これがあれば私は神様だって殺してみせる！  
やらないけど。

「それじゃあ、いくよ」  
／／／

「ああ」  
／／／

徐々に互いに近づいていきついにそれが重なった。

- - - 仮契約!!

「ん……ぷはっ……お、カードが出てきたな、って……んむっ!？」  
//

「ふふ……。はむ……ん……ちゅぷ、んう……ちゅぱ……んんう」  
//

ははは！ やつとおあずけしていたことが堂々とできるのにこの程度で終わるわけがないだろう。

一旦離れたエヴァの唇に強引に己のそれを重ね、舌を相手の口内に入り込ませる。

「んゝんゝー！ ふあ…んくう…ちゅぷ…ん…んむゝう！  
？」／／／

「んん…ちゅぱ…えふあ、のんふえ…」／／／

エヴァが私から口を離そうとしているが無駄無駄無駄ア！！ 今私は己が出せる魔力と気の全力をエヴァを抱きしめることに使っている。絶対に抜け出せないだろう。

下だけでは足りず更に自分の唾液を無理矢理相手へ送る。

エヴァも頑張って抵抗しているが…私の前世で無駄に鍛えられた性技を舐めるなどいいたい。しばらくすると、こくっ…こくっ…と喉を鳴らしていた。

濡れてぼーっとなっている双眸や口から溢れた唾液はさらに私を暴走させるには十分なもので、事実私は止まらなかった（最後まででは行かなかったが）。

今日の教訓：エヴァばねえ

第6話　すすく　えう、あたんにつき（後書き）

エヴァかわいいよエヴァ。

彼女のためなら世界だって滅ぼしてやる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9719p/>

---

不幸だった私の転生物語

2011年1月24日08時05分発行